HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『全体新論訳解』二種の研究［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	許, 春艶
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12071号
Issue Date	2016-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61568
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Xu_Chunyan_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称　博士（文学）　氏名　許　春艶

審査委員　主査　教授　池田　証壽
副査　特任教授　小野　芳彦
副査　准教授　松江　崇

学位論文題名

『全体新論訳解』二種の研究

明治時代に西洋の科学技術や文化を吸収する重要な情報源の一つは漢訳洋書である。漢訳洋書は中国において、宣教師によって書かれた西洋文明を紹介する書物であったが、それらが日本にもたらされて西洋文明、西洋の科学・文化に関する知識を学ぶための情報源、新しい日本語を産出する一つのルートとなったのである。漢訳洋書は近代日本語語彙の成立に大きな役割を果たしたと考えられる。

近年、日中近代語彙交渉に関する研究、特に学術用語の交渉に関する研究には、漢訳洋書を研究資料とすることが多くなり、両国の研究者によって漢訳洋書の内容・資料的価値に関する研究が蓄積されてきた。しかし、漢訳洋書の日本受容という視点からの研究は今後に期待される部分であり、漢訳洋書の和訳書に関する研究はいまだ十分に行われていない。日本では『全体新論』に関する研究は、医学史研究にとどまらず、言語資料として医学用語研究も行われてきた。一方、『全体新論訳解』には振り仮名が豊富に付されており、明治初期の日本語を考察する際に有益な資料であるが、これまでほとんど取り上げられてこなかった。本論文は、漢訳洋書の和訳書に国語学的資料価値を見出し、『全体新論』およびその和訳書『全体新論訳解』を対象にして、和訳書と近代日本語の関連性を探る研究方法を具体的に示そうとしたものである。

本論文が対象とした『全体新論訳解』二種は、ほぼ同時期に漢訳洋書『全体新論』の和訳書として出版されたものであるが、日本語研究資料としてまったく利用されていなかったものである。飛田良文氏が「近代語研究の資料」（『季刊文学・語学』66、1973 年）において言及したのがほとんど唯一の例である。そこでは高木『訳解』に見える左右振り仮名を例示するが、『訳解』の二種の違いには気付いていなかった。

本論文の成果としては、第一に、『全体新論』と『全体新論訳解』二種の書誌調査を着実に行ってそれらの受容状況を明らかにした点を挙げることができる。『全体新論』は中国刊本の恵愛医館刊 5 点、和刻本の越智蔵版 22 点・二書堂発兌 18 点、不明 2 点を、『全体新論訳解』は石黒『訳解』11 点、高木『訳解』6 点、総計 64 点を実際に調査した。八耳俊文「19 世紀漢訳洋書及び和刻本所在目録」（『六合叢談（1857-58）の学際的研究』白帝社、1999 年）に未収録の現存本を多数紹介した点は評価できる。

第二に、『全体新論訳解』二種に見える振り仮名のすべてをデータベース化して、左右振り仮名の機能、高木『訳解』と石黒『訳解』との振り仮名の相違を分析した点を挙げること

ができる。同一の漢文原典を対象としながらも、石黒『訳解』は原漢文をほぼ忠実に訓読した漢文訓読文であるのに対して、高木『訳解』は原漢文に見えない表現を加えた翻訳文であるという相違があることを、和語・字音の両面から全数調査によって述べており説得力がある。

第三に、漢訳洋書の受容の過程について、①『全体新論』の直読・施訓、②『全体新論』和刻本での訓読・書き込み（引用、抄訳）、③和訳書『訳解』二種による訓読文作成の三段階に区分して論述したことである。それぞれの段階での受容を示す資料を例示しながら、漢訳洋書の受容の過程を論じた点は高く評価できる。今後の漢訳洋書とその受容の研究を活性化する内容となっている。

本論文は、言語資料としての二種の『全体新論訳解』について基礎的研究を行ったものと評価できる内容である。ただし、個々の例文の解釈には、まったく問題がないわけではなく、『康熙字典』等の利用者がその内容を誤解して引用・説明した箇所もあり、さらに注意深く分析し、精密な記述を行うべき必要がある箇所が見受けられた。また、『全体新論』と『訳解』二種とについて、漢語とそれに対応する振り仮名の比較にあたっては、従来の振り仮名研究の方法を忠実に踏襲することに力を注いでいて一定の成果を挙げているが、漢訳洋書の受容の過程を配慮して新たな分析方法を検討する必要があると考えられる。二種の『訳解』を取り上げたことによる研究方法上の利点と研究の成果をより明確に主張することも期待される。これらの点は審査を通して指摘された問題点である。これらは、申請者本人も十分に理解しており、今後の研究の進展によって解決が可能な問題と言えよう。

本論文の成果は、日本近代語研究会、訓点語学会、中日対比語言学研究会での口頭発表を踏まえた内容であり、一部は査読付きの研究論文（『国語国文研究』147 号）として公刊されているものである。

以上の審査結果から、本審査委員会は、全員一致で本学位申請論文が博士（文学）の学位を授与されるのにふさわしいものであると判断した。